

しさのみならず、歌詞に込められた深い意味を知ったからである。

タイトルの「Aranjuez non amour」
「わが心のアランフェス」の non amour は悲劇の地・アランフェスを擬人化したものであり、スペイン内戦のおり銃殺された人々を悼む歌詞なのである。

この名曲をシャンソンにするまでの過程が面白い。歌手として大成していたリシャールはスペインでこの曲を聴き、シャンソンに編曲したが、レコード会社からは大反対された。作曲家は決して許可しない、トランペット用の編曲を求めた時も大騒動だった、と聞く耳を持たなかった。そこで、リシャールはある島の豪邸を借り、作詞家のギ・ボンタンペリを呼び出すと豪邸に閉じ込め、歌詞を作らせた。しかも、自らオーケストラを雇い、この曲を歌って録音。見本のレコードを持参して、ホアキン・ロドリゴを訪れると、レコードを聴いてもらった。すると、フランス語を理解するロドリゴが即座

に許可したのである。

その後、リシャールはスペインに招かれ、コンサートを催すことになったが、独裁者の犠牲になった人々への鎮魂歌を歌うことは禁止された。そこで、彼はこの曲の代わりに、大統領に向かって戦争拒否を宣言するボリス・ヴィアンの「脱走兵」を歌った。気骨のある歌手である。

《Aranjuez non amour》の邦題は「恋のアランフェス」であるが、残念ながら、日本語の歌詞は本来の意味を反映していない。

武井よし子（※）「東京物語」を七十年代半ばに観た。二度目の長いインド旅行の後だったこともあり、日本文化にカルチャーショックを受けた気分だった。

これが世界映画史上、有名な映画であることもその後わかった。昭和二十八年制作、小津安二郎監督。この時、笠智衆四十九歳、杉村春子は四十七歳、嫁役の原節子三十三歳。セリフのテンポ、映像の美しさ、無駄な場面をバツサリ

省略してしまう編集の凄さ。そして、これを戦後すぐに制作した溝口監督の恐ろしさ。

私はこの映画をみるたびに泣く。例えば、祖母が孫を土手で遊ばせている時のセリフ。「アンタ、大きくなったらお父さんのように医者になるのかね。私はその頃までには生きていないだろうね。」そして、その通り彼女は間もなく亡くなる。彼女が死んだ朝、三男が帰宅する。嫁が港に行つた義父を迎えに行く。義父はいつものようにゆつたりと「いゝ朝焼けだった。今日も暑くなるぞ」と言う。

人が泣く理由の大半は悲しみなのだが、この映画の場合、ストーリーよりも、ちよつとしたセリフや仕草に涙が出る。海外で鑑賞すると一段と泣ける。

奥山かほ（※） 映像が脳裏に焼き付いて忘れられない映画は、タルコフスキーの「惑星ソラリス」。

主人公が宇宙で、人間の意識を反映する不思議なソラリス星の海と出会い、やがて地球に戻って見

たのは、故郷の我が家がソラリスの海に映ってフェードインしてゆくラストシーン。本当に彼はかつてここに住んでいたのか、幻想か。「ノスタルジア」でもイタリヤを訪ねる主人公の目に映るラストシーンは、中世の廃墟の中にロシアの我が家が浮かびそこに雪が降ってくる。

いずれも監督のロシアへの郷愁と、我々日本人がロシア文学を通して抱いているイメージ……広大な白樺林と時折こだます樹々の音、鳥の声、水の流れ、ロシア的な美を映像でみせてくれる。さらに劇中交され或いは流れる朗読のロシア語の美しい響き。

一方、映画を人間ドラマとして見る時、素晴らしいと今でも思い出すのは、ヴィスコンティ監督の諸作品、中でも「山猫」のバート・ランカスターの演技。「空中ぶらんこ」や「OK牧場の決闘」に出ていたこの俳優の起用は当初危ぶまれたが、狩猟に来た丘の上の休憩で執事を相手に、消えてゆく貴族